SML理論による

音楽教育とハイテク

その71

Music Education and High-technology

鈴木　寛（兵庫教育大学教授）

Sibelius 2 （5）

音符入力（その２）

先月号では「アルファベット入力」を紹介しましたが、今月号ではMIDI鍵盤を使った入力を紹介します。

Finaleでは入力モードを切り替えることで、①マウス入力や②ステップ入力、③鍵盤によるスピード入力、④リアルタイム入力、などを選びます。

ところが、Sibelius2では基本的には入力モードの切り替えという操作は有りません。モードの切り替えを「オン・オフ」の切り替えで変更することなくいつでも好きなときに入力方法を選ぶことができるのです。つまり、マウス入力をしている最中でもアルファベット入力やステップ入力等を行うことができ、単音はアルファベット入力で、和音はMIDI鍵盤入力で、編集はマウスでというように同時並行で音符入力ができるのです。

このことは、入れやすい入力方法を「常にモードを意識する」ことなく行えるというSibelius2ならではのアイデアです。

それでは、まずMIDI鍵盤の出力をコンピュータに接続しましょう。この接続はホストケーブルを利用するか、USBケーブルを選びますが、音源経由の場合が普通ですからシリアルケーブル（ホストケーブル）かMIDIケーブルを音源の入力端子につなぎ、音源とコンピュータをUSBやその他の適切なケーブルでつなぎます。そこで、Sibelius2を立ち上げます。

新規ファイルを用意して、音符を入力したい位置をクリックします。多分その時点で何か音符が入力されるかも知れません。Delete又はBackSpaceで取り消した位置から入力できます。或いはESCを押した後入力を開始したい小節をクリックすると「拍」ではなく「小節」が選択されその小節の頭が入力位置になります。テンキーから音符の種類を選んでMIDI鍵盤を弾いて見ましょう。選んだ長さの音符で次々と入力できますね。これが**「ステップ入力」**です。勿論入力された音符に「S」や「↑」「↓」を後から押してスラーを付ける等の作業を同時並行で行えます。

もし、MIDI鍵盤が正しく接続されているのに反応が無いときは「再生」→「デバイス」でダイアログを開くと、・再生デバイスと・入力デバイスの設定が画面の上下でできるように表示されます。再生デバイスはインストール後最初の設定で自動的に検出され、音源一覧が表示されます。「テスト」ボタンをクリックすると音が出ますが、MIDI接続さえしてあれば何の苦労もなく自動的にMIDI環境がセットアップされます。Windowsでは一般的にこのMIDIセットアップは自動ですが、Macでは自分で設定するのが普通でした。特にOMSやFreeMIDIでMIDI環境を設定するのは操作が簡単なMacでも頭を悩ませる作業で、一発で音が出ることは希でした。ところが、このSibelius2ではOMS未対応のＯＳＸですら簡単に自動的にMIDI機器を検出して設定してしまいます。

入力デバイスは画面の下半分の設定ダイアログの入力デバイスの一覧から選んだ鍵盤をワンクリックしますと、インジケータが光ります。これでで完了です。

このステップ入力は和音入力には大変有効ですが、それ以外にSibelius2のインテリジェントなシステムが♯や♭等の臨時記号を正しく入力してくれます。いわゆる異名同音のエラーがほとんど起こりません。

右手でコンピュータのテンキーを、左手でMIDI鍵盤を、というスタイルがなじまない人には、次ぎの「**フレキシタイム入力**」を試してみると良いでしょう。

Finaleではタッピングに合わせてリアルタイムに入力するモードが用意されています。これは、予め連符や最小の音符を設定しておけば大変正確に入力でき、私もよく利用しました。

Sibelius2ではタッピングの代わりに演奏者のテンポに合わせるテンポトラッキングの技術が応用され多少のテンポの揺れにも対応できることになっています。

Finaleでは入力後必ず「クアンタイズ」という作業が必要でしたが、Sibelius2ではリアルタイムに「クアンタイズ」を行います。この**フレキシタイム入力**はまだ完成度は高くありませんが、よく練習すれば適切な使い方ができます。

「音符」→「フレキシタイム」をクリックします。

設定は「音符」→「フレキシタイムのオプション」を開きます。「リズムの調整」にチェックを入れ、最小音価を選び他に音符の表記を①スタッカート②テヌートも含めるかを選びます。この①②にチェックを入れると演奏のタイミングが大変微妙になり、初心者の演奏では予期しない音がスタッカートになったり休符が入ったりしますのでこのオプションにチェックを入れるのは「鍵盤の達人」でしょう。

フレキシタイムの設定では①なし（ノンルバート）から④高（モルトルバート）まで４段階設定できますが、曲によって適切なものを選ばないと入力した覚えのない付点音符やシンコペーションが続出します。

この方法は全曲入力する時より、部分的にリズムの異なる複数の声部があるような場合に数小節だけ使えば大変有効です。つまり。いちいち声部（レイヤー）を切り替えて入力しなくても良いからです。